

山東方言二字組変調の地理言語学的研究

遠 藤 光 暁

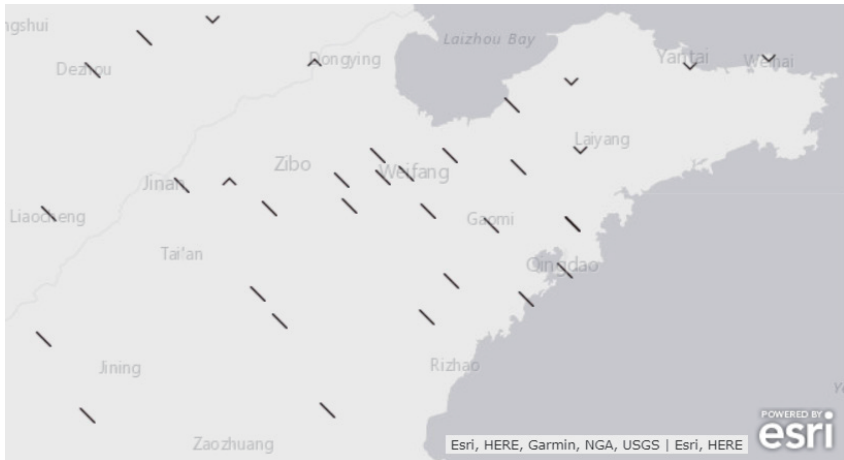
1. はじめに

この論文では前稿（遠藤 2018）に引き続き、山東方言の声調の地理言語学的研究を行う。前稿では単字調を扱ったが、本稿では二字組の変調を扱う。ただし、軽声前変調は山東方言では通常の二字組と異なるパターンとなり、特に意義深いため、別稿にて専門的に取り扱うこととする。

前稿では 20 世紀の 3 つの時期の地理分布を比較したが、変調についてはいくつかの地点を除き記述が与えられるのは 80 年代以降に限られる。しかも、地点数も少なく、地方志に見られるもので参照し得たものは安丘・金郷・五蓮・高密・寿光・昌邑・昌乐・新泰・青州・青島・即墨（二種）・平度・蒙阴・掖县（莱州）・聊城・德州・临沂・临朐・宁津・济南・淄博市博山区・潍坊市潍城区・胶南・诸城・郯城・章丘・利津・威海・招远・莱西・烟台・庆云・金郷・章丘・聊城・滨县（滨州）西部二三小区北部などにとどまり、その他の資料は未使用である。

2. 上上変調

最も分布面積が広いのは上声が 2 つ連なった場合の変調である。これを「上上変調」と称する。その他の組み合わせの変調も一字目と二字目の調類を「陰・陽・上・去」と略称して二字の組み合わせで「～～変調」と呼ぶこととする。



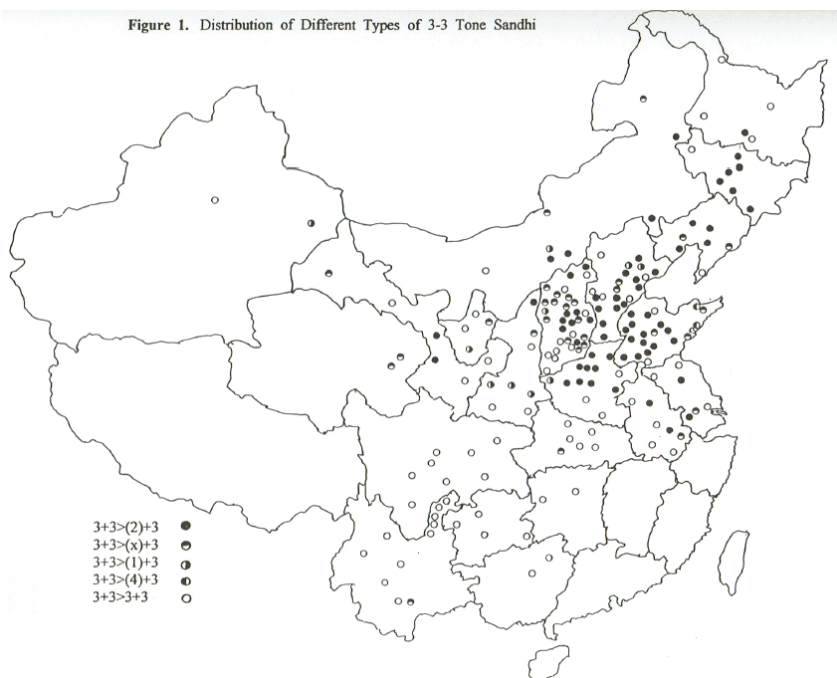
地図 1 上上変調

- ＼ A 陽平 53 に合流
- ／ B 前字が 54 に変化するが合流しない
- ▽ C 前字が 42 に変化し去声・陽平と合流

このタイプは山東省のほぼ全域を覆っているが、金郷・章丘・聊城・濱州（濱州）西部二三小区北部などでは生じていない。大半が A タイプで、単字調では高平 55 の前字が北京語と同様に陽平 53 と合流する。山形の記号は交替後の調値は高降りとなるが、陽平と合流しないものであり、こちらのほうが古いタイプを反映することとなる。谷型の記号は主として山東半島に分布し、そこでは陽平と去声が合流してともに高降 42 となっているので、基本的には A タイプと同じだが、去声が後に陽平に合流したものと考えられる。

上上変調は官話地区ではかなり広い分布範囲を占めることが知られており、地図 2, 3 は Shi (1999: 119) による分布図である。

Figure 1. Distribution of Different Types of 3-3 Tone Sandhi



地図2 官話地域における上上変調

地図2, 3のうち, 北京近辺と遼寧・吉林に見られる上上変調は低降昇調が連続すると高昇調に変化するので異化によるものと考えられているが, 山東省や河北省南部・河南省北部では上声の単字調は高平55なので, それが連続して55+55→53+55のように変化することになる。依然として異化によるプロセスによるとも言えないことはないが, 低調が連続すると発音が困難なため異化が生ずるのは自然な音声的過程だと考えられるのに対して, 高平調が連続しても特に発音には困難はなさそうなのが難点である。

これについては平山(1983)が山東方言の軽声前変調に基づいて上声の古調値を*24と再構しており, 地図4には80年代以降の上声の軽声前変調調値を示しておいた。そして, 地図5の20世紀の40年代・50年代・80年代以降の3つの時期の上声単字調調値を重ね合わせた地図において赤で囲んだ地域で調値の変

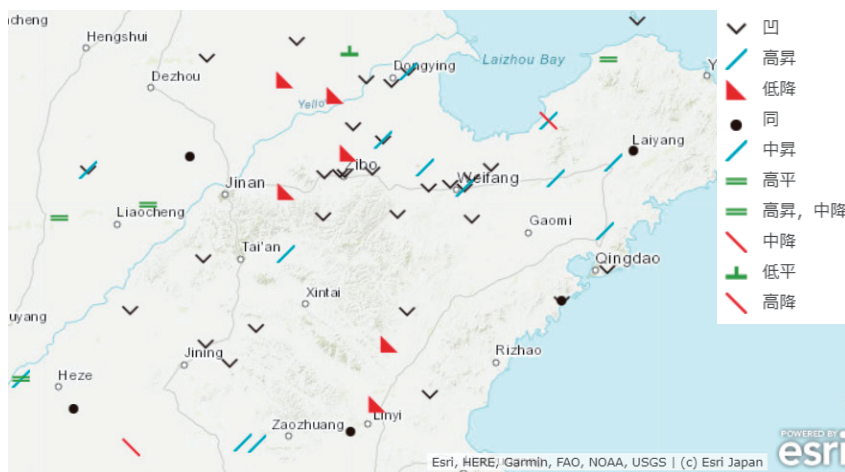


地図3 官話地域における上上変調 (拡大図)

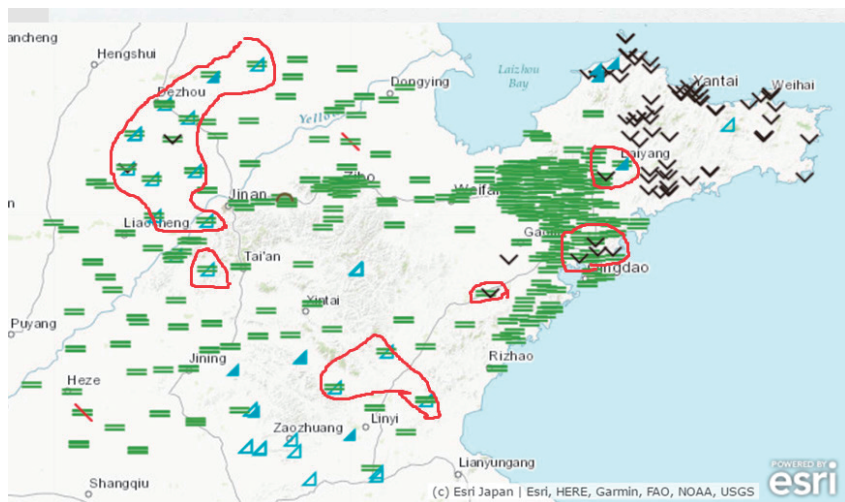
化が生じており、青島一帯では 40 年代から 50 年代になるまでに低降昇調が高平調に変化しており、德州あたりでは 50 年代から 80 年代の間に低昇調が高平調に変化していることが分かる。つまり山東省周辺部において済南の調値に取って代わられたこととなるが、それ以前の上声単字調が低降昇調ないし低昇調であったことがこれによって明らかである。また遠藤 (2015) でも Edkins の 1853 年, Forke の 1895 年, Bousack の 1957 年の記述において済南の上声が高昇調であったことが確認されている。更に同論文では山東省南部の中原官話と同じく上声単字調が 55 である河南省の開封において Edkins の 1853 年の記述では 13, 趙元任の 1922 年の記述では 45 であったことにも触れられており、こうした地域の上声単字調が高平調 55 に変化したのは比較的近年になってからのことである。

以上からすると、北京周辺の上上変調のほうが異化が生じる音声的原因を保っており、現在上声単字調が高平になっている方言で上上変調が生じるのは歴史

的な変調規則を単字調の調値が変化してからも保っているためだと考えられる。なお、16 世紀初に既に上上変調が北京一帯で存在していたことについては遠藤 (1983) を参照。



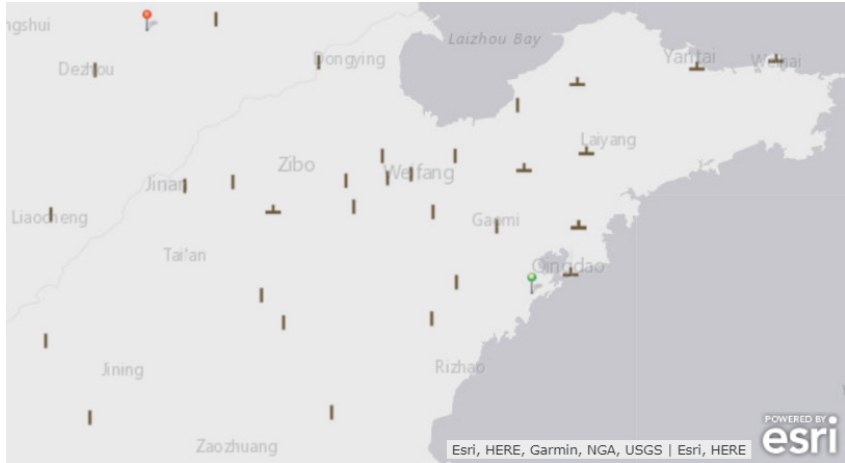
地図 4 80 年代以降の上声の軽声前変調調値



地図 5 20 世紀 40・50・80 年代以降の 3 つの時期の上声単字調調値

3. 陰平が前字となっている組み合わせ

山東省において上上変調に次いで広い分布範囲を持っているのは陰平が前字に位置する組み合わせで生じる変調である。



地図 6 陰平が上字となった組み合わせの変調

-  A 陰平の前だけで陰平が 24, 23 等に変化する
-  B 〃 陰平 213 が 55 に変化して上声に合流する
-  C 〃 陰平 213 が 21 に変化して去声に合流する
-  D 陰平・去声（および入声）の前で陰平が 24, 23 等に変化する

最も多いのは D タイプであり、陰平が陰平のみならず去声（ないし入声を保存する方言では入声）の前でも 24, 23 等に変化する。その他の A・B・C タイプは陰平が陰平の前でだけ変調を生ずるタイプであり、中和を生じる方が相対的に新しい段階であることは明らかなので、後に D タイプの諸方言において去声の前でも変調が生ずるようになったとすべきである。

鄭 (1966) は当時変調の記述に接することのできた北京・瀋陽・西安・成都の 4 地点の状況に基づいて、低調が重なると異化を生じて変調が生ずる傾向を帰

納している。濟南方言の場合も陰平 213 が陰平ないし去声 21 の前で 23 に変化するというプロセスなのでそれに当てはまる。

陰平の変調は地図 1 と地図 6 の範囲では上上変調が起きる地点のすべてで生じているが、その他の地域での地理分布は分からない。ちなみに、西安には陰陰変調がある（陰平は低降調）。

4. 上声が前字になった組み合わせ（上上を除く）

4.1. 上陰変調

地図 7 には上声と陰平の組み合わせで変調が生じる地点が赤・紫・青の点で示してある。ただし、地図 1 と地図 6 と重ね合わせてあり、色がついている地点だけで上陰変調が起こる。



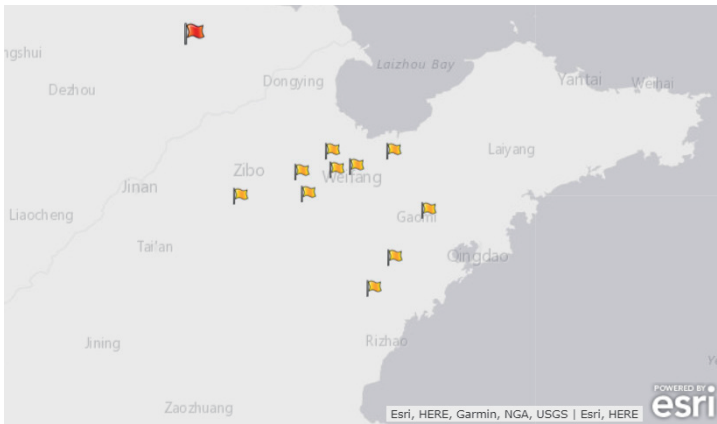
地図 7 上陰変調と上上変調・陰平上字の変調の重ね合わせ

- A 上声 55 が 53 に交替し，陽平と合流
- B 上声が 24 に交替し，陰平と合流
- C 平声に合流，調値は威海では 312，煙台では 35

半島部を除く山東省では陰平はふつう 213 型なので上声 55 が低声調の前で高降調になるのは同化によるものと理解される。ただし、この変調が生ずる地点は限られており、近年の個別的変化によるものと考えられる。

4.2. 上去変調

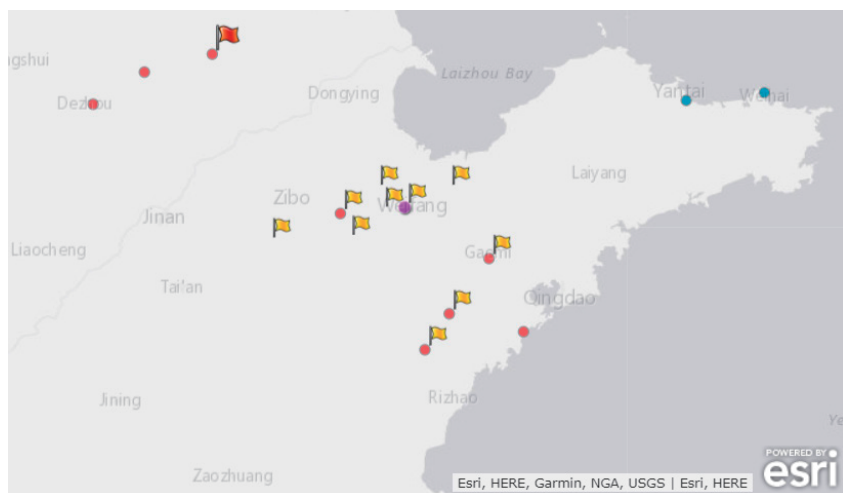
地図 8 は上去変調の生じる地点であるが、濰坊を主とした限られた地域のみで見られる。



地図 8 上去変調

-  A 上声 55 が 24 に交替するが、陰平とは合流しない
-  B 上声 55 が 24 に交替し、陰平に合流する

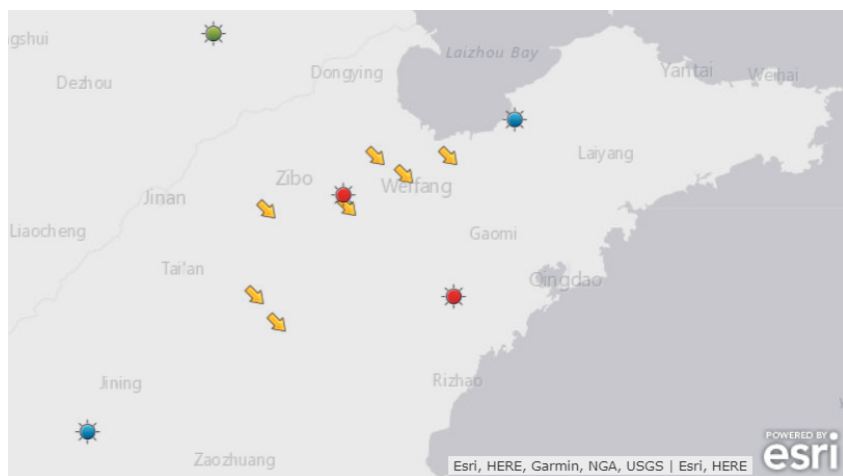
こうした地点では通例去声は低降調または低降昇調であることが多い。地図 9 は上陰変調と上去変調の地図を重ね合わせたものだが、一致する地点もあるものの、異なる分布パターンを示している。



地図9 上陰変調と上去変調の生じる地点を重ね合わせたもの

4.3. 上陽変調

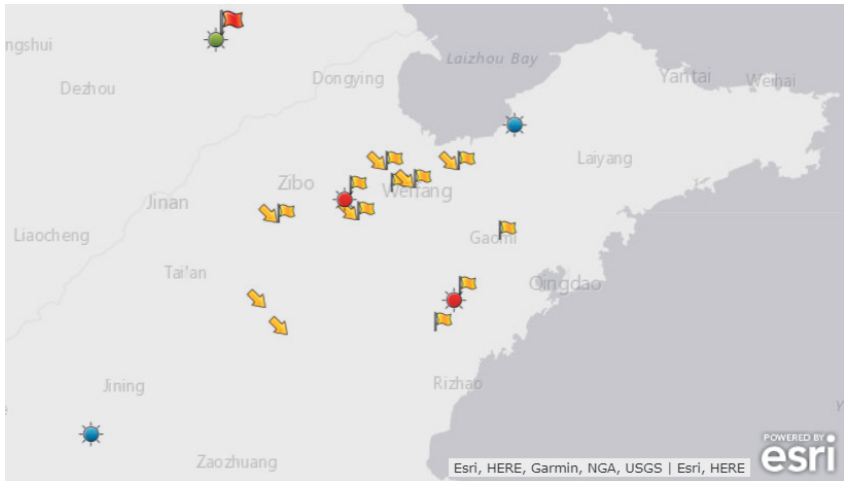
上陽変調が生じる地点は地図 10 に示した通りである。



地図 10 上陽変調

- ☀️ A 上声が 435 に交替し、合流しない
- 👉 B 上声 55 が 214 に交替し、陰平と合流
- 🌊 C 上声が 45 に交替し、合流しない
- ☀️ D 慶雲のタイプ、古濁平 55 が古濁平の前で 54 に交替し、古清次濁上 55 が古濁平の前で 44 に交替し、両者は古清次濁上の前では 31 に交替する

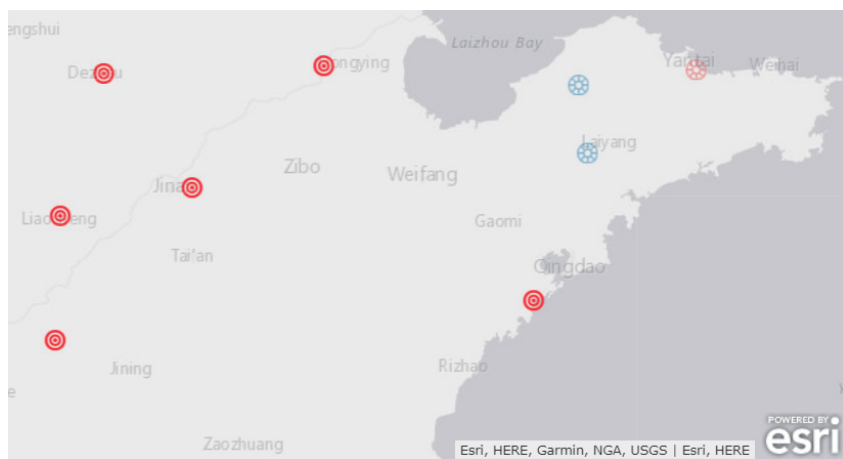
地図 8 と地図 10、即ち上去変調と上陽変調を重ね合わせたものが地図 11 であり、かなり同じ地点で生じていることが分かるが、完全に同じではない。ただし上声が前字となっている変調は濰坊のあたりで帯状に伝播したことが窺われる。



地図 11 上去変調と上陽変調を重ね合わせた地図

5. 去去変調

去去変調が生じる地点は地図 12 に示した通りである。

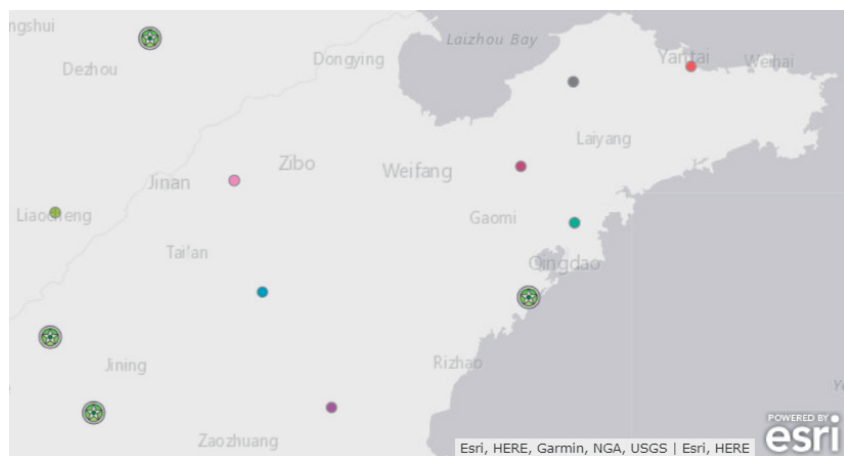


地図 12 去去変調

- ◎ A 前字の去声 21 が 24 に交替し，陰平と合流
- ⊗ B 前字の去声 42 が 21 に交替し，合流しない
- ⊗ C 煙台，前字の去声 55 が 31 に交替し，陰平と合流

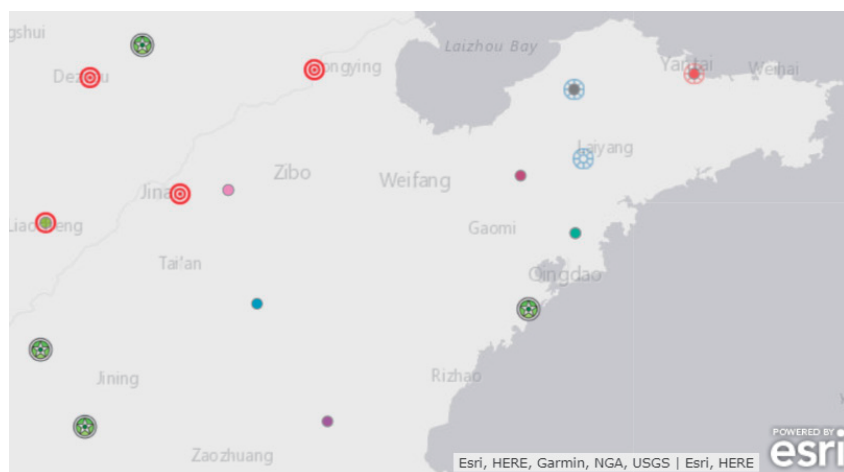
半島部を除くと，去声はおおむね低降調ないし低降昇調なので，それが重なり異化が生じたものと理解される。中和により対立が減少する性質のものなので，地理的には周辺分布をなしているものの，それぞれの地点で同様の音声条件下に同様の変化が独立に生じたものとすべきである。

6. 陽去変調とその他の組み合わせで生ずる変調



地図 13 陽去変調とその他の組み合わせで生ずる変調

陽平 42 が去声の前で 55 に交替し、上声に合流する

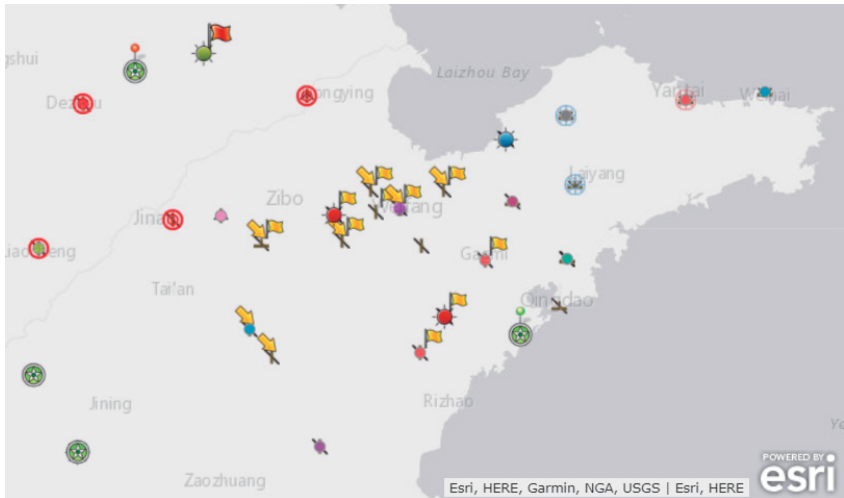


地図 14 去去変調・陽去変調・その他の個別の変調

陽平 42 が去声の前で 55 に交替して上声に合流する方言が 4 地点あり、これは異化によるものとなろうが、各地で独立に生じたと考えざるを得ない。地図 13 のその他の各種の色の丸はそれぞれ 1 地点ずつしかなく、違う条件の下で変調が生じている。地図 12 と地図 13 を重ね合わせたものが地図 14 であり、こうしたものはすべて周辺部で独立に生じたと思われる。

7. 全体のまとめ

以上すべての変調の地図を重ね合わせると地図 15 のようになる。上上変調や陰平関連の変調はほぼすべての地点で生じており、重ね合わされた結果たいてい見えなくなっている。



地図 15 全体の総合図

このような全体としての変調の地理分布を表示した地図から出発すると、あたかもそれぞれの地点ごとにそれぞれの変調の体系があるように見做す人も現れるかもしれない。だが、上で見て来たように各々の組み合わせごとに検討していくと、実際にはそれぞれ異なる地理分布の範囲があり、変化の生じた年代や来歴や原因がいずれも異なっていることを透視することが可能になる。

そこで、Endo (forthcoming) で述べたように関連する音韻変化の間においては地理分布が広い順に古いと考えられ、山東方言において生じた変調を発生順に並べると以下ようになる：

- 1) 上上変調は最も分布面積が広く、北京一帯において遅くとも 16 世紀初頭には存在していた。しかし、山東省においては全体を覆うものではなく、また本来の異化が生ずる音声的な条件も失われていて、変調規則のみが継承されてきたこととなる。
- 2) 陰陰変調がそれに次ぎ、まだ低調が重なると異化が生ずるという音声的条件を保っている。済南など多くの地域では更に去声の前でも同様の変調が生ずることとなった。
- 3) 上声が前字に位置する場合の変調は上の 2 つよりも地理分布がかなり狭く、濰坊あたりの帯状の地域を中心として拡がった。
- 4) その他の組み合わせの変調は周辺地域において独立に生じた。

変調が最も少ないのは安丘と青島であり、古風な特徴を保っているものと言えよう。

これを一地点について即して見ると、例えば済南では次のような変調が生ずる：

前 字 \ 后 字	陰 平	陽 平	上	去	輕 声
陰 平	2 1 3—	2 3 —	2 1 2—	2 3—	2 1—1
陽 平	4 2—	4 3—		5 5—	5 5—5
上	5 5—		4 2—		2 3—4
去	2 1—			2 3—	5 5—2

表 1 済南の変調 (平山 1983 のまとめに拠る)

こうした変調の形成過程は同一時期に同一の原因によるものではなく、それぞれの組み合わせに関して山東省ないしより広い範囲の地理分布を求めること

により、それぞれ異なった来歴を経てきたことが明らかになる。この論文では軽声前変調は扱っていないので、それをさしあたり除外すると、漢語方言でよくあるように対角線上の組み合わせにおいて変調が生ずる傾向がまず認められる。そのうち上上の組み合わせの変調が最も古く、陰陰変調がそれに次ぎ、陰平が前字に来る場合の他の組み合わせはそれよりも後に生じた。その後に陽陽変調・陽去変調・去去変調が生じたこととなるが、この3者の間の先後関係を推定するには一層精密な地理分布を検討する必要がある。

附論 別の方向に変化した方言：牟平方言における前字中和

官話系では声調の中和が生ずる場合、通例第二音節以下となるが、山東半島の牟平では第一音節において中和が広範囲に生じている。この点南部呉語に類似する。



地図 16 牟平の位置 (赤字で囲われた地域, Google マップによる)

羅 (1992) の記述によると、二字組では表2のような変調が生ずる。同書の説明では、A式が最も常用され、B式が次に常用され、C式となるものは比較的少ないという。

それによると、陰平と上声が後字の場合、前字が55の調値となるパターンがおおむね優勢であり、後字が陽平の場合は前字が213、後字が去声の場合は前字が51となる傾向が見られる。こうした語類がどのよう

な音声条件をなしているのか、更に大量の語彙を調査する価値がある。

两字组连读变调表					
前 后 字	阴平 51	阳平 53	上声 213	去声 131	
阴 平 51	A $\overset{51}{51}$ +51 飞机 偷油	A $\overset{53}{53}$ +51 肥鸡 头油 茶盅儿 咸盐	A $\overset{213}{213}$ +51 打春 本家 结婚 热天	$\overset{131}{131}$ +51 定亲 地瓜 冻疮 石缸 货车 树梢儿	55
	B $\overset{51}{213}$ +51 冰凉 精稀	B 53+51 前年 前窝儿 勺儿星 虫儿牙	B $\overset{213}{213}$ +51 木锨 拉乡 辣椒 药膏儿		
	B 51+51 秋天 西医				
阳 平 53	A 51+53 梳头 包圆儿 邮局 天河	A $\overset{53}{213}$ +53 墙头 蒲团 皮球 茶壶	213+53 水头 井绳 发条 演剧 脸盆 水鞋 攒钱 木材 擦壶 里房儿	A $\overset{131}{131}$ +53 地图 戏台 B $\overset{131}{131}$ +53 外行 白糖 C $\overset{131}{131}$ +53 见强 下棋	213
	B $\overset{51}{213}$ +53 锅台 通红 乡熊 天堂	B 53+53 拔河 圆坟 黄河 学徒			
上 声 213	A $\overset{51}{51}$ +213 生长 修表 花脸 埋马	$\overset{53}{53}$ +213 涂改 糊口 划脸 无理 骑马 洋火儿	$\overset{213}{213}$ +213 省长 手表 土改 指点 买马 虎口 五里 起码儿	$\overset{131}{131}$ +213 字典 号码儿 卖马 站九 户口 大雨 物理 白酒	
	B 51+213 凉水 奔产				
去 声 131	A 51+131 通志 商调 干饭 门系儿	A $\overset{51}{51}$ +131 同志 芹菜 学校 糖蛋儿	213+131 走字儿 吃饭 发殡 热炕 柳树 海蜇	A $\overset{131}{131}$ +131 上吊 戴孝 B $\overset{131}{131}$ +131 抗住 上席	51
	B $\overset{51}{213}$ +131 家庙 精瘦 家后 麻袋	B 53+131 罚站 盘炕			

表 2 牟平方言二字组连读变调表

謝辞

この論文は 2017 年度青山学院大学経済研究所研究助成および JSPS 科研費 18H00670, 18H05510 による研究成果の一部である。

参考文献

- 远藤光晓 (1983) 《翻译老乞大朴通事》里的汉语声调, 《语言学论丛》13: 162-182。
远藤光晓 (2015) 近 150 年来汉语各种方言里的声调演变过程——以艾约瑟的描写为出发

点, 远藤光晓、石崎博志编《现代汉语的历史研究》, 199-228, 杭州: 浙江大学出版社。

遠藤光曉 (2018) 山東方言單字調の時系列言語地図, 『経済研究』10: 1-37。

Endo, Mitsuaki. (forthcoming) Correlation between onset and vowel, and the principle of “wider distribution” as revealed in the changing process of the forms for “rain” in Tai-Kadai, In: Endo, M. & Satoko Shirai, eds. *Papers from the Fourth International Conference on Asian Geolinguistics, Studies in Asian Geolinguistics, Monograph Series*, No.4, 66-70, Tokyo: Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa, Tokyo University of Foreign Studies.

平山久雄 (1983) 山东西南方言的变调及其成因, 《アジア・アフリカ語の計数研究》21: 59-81.

罗福腾 (1992) 《牟平方言志》, 北京: 语文出版社。

Shi, Feng (1999) A Tone Sandhi in Chinese Northern Dialects, In: Shigeki Kaji (ed.) *Proceedings of the Symposium Cross-Linguistic Studies of Tonal Phenomena Tonogenesis, Typology, and Related Topics*, 109-119, Tokyo: Institute for the Study of Languages and Cultures of Asian and Africa, Tokyo University of Foreign Studies.

鄭錦全 (1966) 官話方言的聲調徵性跟連調變化, 《大陸雜誌》33/4: 102-108。